

令和元年6月18日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02808

研究課題名(和文) 日本語学習者の自他動詞使用における認知と言語化の関連性：視線分析を用いた比較研究

研究課題名(英文) A comparative study for Japanese language learners on the cognitive process and encoding pattern in using transitive/intransitive verbs by analysis of eye movement

研究代表者

吉成 祐子 (Yoshinari, Yuko)

岐阜大学・日本語・日本文化教育センター・准教授

研究者番号：00503898

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「自他動詞構文」選択における日本語学習者に共通する言語的特徴(母語干渉、中間言語等)そして誤用の原因を明らかにするため、認知的、語用論的見地から実験手法を用いた検証を行なった。視線分析装置を用いた自他動詞選択課題実験では、日本語母語話者と学習者、正答者と誤答者の動詞や助詞への注視点や注視時間の違いを明らかにした。また、謝罪場面での言語表現を収集した質問紙調査では、目標言語、学習言語、そして学習者の母語での表現を比較することにより、自他動詞選択の傾向やその使用と責任意識との関わりを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、主に日本語教育の向上に貢献するものとなっている。日本語学習者に誤用の多い自他動詞構文の使用における、日本語母語話者と学習者の認知的、語用論的傾向を比較・検証する本研究は、誤用の原因を探る新しい観点を提示することができた。また、本研究で得られた学習者の母語との相違点や類似点、学習者共通の習得段階の考察等は、日本語指導を行なう上での、自他動詞構文習得を促す一助となるだろう。

研究成果の概要(英文)：This study examined the Japanese language learners' linguistic features, such as interlanguage and language transfer, in their choice of transitive/intransitive verb constructions. The researcher conducted two different types of experiments using eye-tracking for one and questionnaire in the other. The eye-tracking method, which analyzed eye-movement of Japanese native speakers and learners while choosing transitive/intransitive verb from the options, verified the different tendencies of fixation and duration on verbs and particles. The original questionnaire, which examined the relation between the use of transitive/intransitive verb and motivation of choosing them in apologetic situations, verified the correlation between choice of verbs and feeling of accountability for the unpleasant consequence. These results showed the existence of language transfer and specific features of Japanese language learners in using transitive/intransitive constructions.

研究分野：語用論

キーワード：視線分析 自他動詞 事態描写 第二言語習得 言語比較

1. 研究開始当初の背景

認知言語学の分野では、事態描写の言語化には話者の事態認知が関連していると考えられており、どの参加者が際立っていると認識するかが、構文タイプの決定に大きく関わるとされる。このような事態認知の傾向は転移し、第二言語習得にも影響を与えているとの指摘もある。しかし、実際に話者がどのように事態を見ているのかを検証するために視線分析を行なう研究は少ない。特に、本研究で取り上げる「自他動詞構文の選択(自動詞・他動詞の使い分け)」は、何を主語として表現するのかによって構文が決定されるため、話者の事態認知と関連が深いと考えられるが、視線分析を用いた実証研究を行なっているものは管見の限り見当たらず、第二言語習得研究においても同様である。

研究代表者は、これまで非意図的事象や移動事象についての映像実験により、事態描写における言語表現の検証を行ってきた。そして、同一事態を描写する際、話者によって用いる構文は異なるものの、言語によって一定の使用傾向があり、言語間に差が見られることを明らかにしてきた。また、話者の視線の動きと言語表現との関わりについて、移動事象や授受事象を対象に検証を行ってきた。このような検証方法は、第二言語習得にも応用可能であり、学習者が第二言語を使用する際の視線の動きと言語表現の関わりを検証することにより、認知傾向の転移を含め、第二言語習得における言語と認知の関係についての解明をさらに進めることができると考え、着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、言語によって表現方法に特徴があり、日本語学習者の誤用が多く見られる「自他動詞構文」を取り上げ、学習者特有の表現の特徴や誤用の原因を明らかにすることを目的とするものである。従来、誤用の原因として母語の影響(言語転移)や学習者に共通する言語的特徴(中間言語)が関わると指摘されてきたが、より厳密に解明するため、複数の母語の学習者グループの言語表現(各母語と学習言語である日本語)と、日本語母語話者の表現を比較分析する。その際、言語構造だけでなく、視線分析装置を用いて認知傾向の側面からも検証を行なうことで、話者の事態認知と言語化の関連性を明らかにしていく。さらに、実際の言語使用場面にも注目し、発話場面での自他動詞構文の選択に関わる要因も探る。

3. 研究の方法

大きく三つに分けられる。1)日本語を含む各言語の自他動詞構文の特徴を形態的・統語的に分析するために、包括的・統一的な記述を行なう。個別言語の記述については各言語担当者が担当し、言語対照を含む包括的なまとめは研究代表者が行なう。2)認知的な側面からの分析として、視線分析装置を用いた言語実験を行なう。視線分析装置では、注視点の位置や注視された時間等を計ることができる。発話者が事態のどの部分に注目して事態を言語化しているのかを検証するため、自他動詞構文に関わるイラスト(例えば「手でドアを開けている絵」に対して「自動ドアが開く絵」)を描写する実験を行ない、その際の視線の動きと言語表現を分析する。また、自他動詞構文の正誤を認識する際の認知的手がかりを明らかにするため、文法的に正しい自他動詞構文を選択する課題を行い、日本語母語話者と学習者の認知傾向を検証する。3)語用論的な側面から分析するため、自他動詞構文が用いられる、謝罪場面での言語表現を収集する質問紙調査を行なう。相手の持ち物に損害を与えることになる場面を、原因の所在(内的・外的)と回避可能性(回避可能・不可能)の組み合わせによる条件に分け、それぞれの状況における発話と、その状況に対する意図性や責任感についての評定も収集する。対象とするのは日本語母語話者、日本語学習者の日本語だけでなく、母語の干渉も検証するため、学習者の母語での調査も行なう。

4. 研究成果

1)各言語(日本語、英語、イタリア語、ハンガリー語、ロシア語)の自他動詞構文の特徴の記述を行なった。比較研究のために必要となる統一的な記述、また視線分析の実験刺激や質問紙作成のために必要な自他動詞構文の情報をまとめた。自他動詞構文の記述において貢献できたものとしては、国立国語研究所が作成する「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP))へのデータ提供があげられる。これは、世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースで、研究目的でダウンロードして利用できるものとなっており、データのなかったイタリア語の自他動詞について情報提供を行なうことができた。2)認知的な言語実験として、日本語母語話者・日本語学習者(イタリア語、ハンガリー語、英語、中国語母語話者)を対象に、日本語の自他動詞構文の正誤判断課題を行なった。文法的に正しい構文を含む3つの選択肢(例:ガラスを割る/*ガラスを割れる/*ガラスが割る)の中から正しいものを選ぶ課題である。18問中の正答と誤答、日本語母語話者と学習者の視線の違いなどを分析した。分析では、日本語の自他動詞構文の違いである、助詞、述語(自動詞か他動詞か)に注目してエリアを定め(AOI: Area of Interest)、そのエリアへの注視時間、頻度、注視順等を比較した。その結果、母語話者の正答検出の速さは常に学習者を上回るが、注視するエリアに大きな違いはないことがわかった。どの参加者も主語や文末表現ではなく、助詞や自他動詞に注目していた。母語話者は常に正答するが、学習者は誤答もあ

り、学習者の正答・誤答の際の視線の動きを比較すると、正答であれ誤答であれ、注視するエリアは同じであるが、誤答の場合、より長く、何度も助詞や述語を注視する傾向が見られた。この結果より、学習者は自他動詞の形や動詞直前の助詞の違いが重要であることは理解しているが、正答を導き出せないのは自動詞・他動詞と助詞の正しい組み合わせを習得していないからであり、習得のステップとして、まず構文における重要な部分の認識、次に正しい知識の定着があると考察された。3) 質問紙調査で取り上げた4つの謝罪場面(例:友達に借りていた本にコーヒーがこぼれて本が汚れ、それを返却する際の場面)で、原因の所在と回避可能性の組み合わせによる4つの要因(例:自分の過失、突然のめまい、隣の人にぶつかられて、強風によって)があり、合計16の状況について検証を行なった。対象は各言語100名程度で、1つの状況に対して25名の回答を得て分析している。母語の干渉を検証するために、様々な言語を統一的に比較できる一定の基準でコーディングを行なった。その基準(例:謝罪表現の有無、意図性の有無表明、自他動詞使用、理由の説明等)は研究協力者ととも検討し、設定した。例えば、ハンガリー語を母語とする日本語学習者の言語使用を分析する場合、日本語母語話者の結果とハンガリー語での結果を比較することになる。コーディングされた言語表現は様々な側面から分析することができるが、自他動詞構文の使用については、母語にはない日本語特有の表現が見られる一方で、母語の転移や学習者特有の表現も見られた。日本語母語話者は、風や地震といった自然災害が要因の場合(外的・回避不可)「(私が)コーヒーをこぼして、本を汚してしまった」のような、話者を主語とする他動詞使用が多くなるが、ハンガリー語ではこのような他動詞使用がないにもかかわらず、学習者の表現では一定数見られた。その一方で、母語の転移と考えられる、無生物主語(例:風がカップを倒した)の使用も見られた。さらに、学習者特有の表現といえる、受動態(例:風にコーヒーをこぼされた)の使用があった。ハンガリー語には受身文がないことから、日本語の被害受身を学習した上での過剰使用の可能性が考えられる。このような誤用の原因も、目標言語と母語との言語使用の比較によって、明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

吉成祐子・眞野美穂・江口清子. 印刷中. 「日本語学習者の使役移動表現: INTO 経路概念表出における中間言語的特徴」社会言語科学. (査読有)

Yoshinari, Yuko. 2019. Using Eye Tracking to Analyze Grammatical Errors of L2 Learners in Japanese Causative Alternations. Proceedings of the Applied Linguistics and Language Teaching Conference 2018: 186-198. (査読有)

吉成祐子, 江口清子, 眞野美穂. 2016. イタリア語およびハンガリー語を母語とする日本語学習者の移動表現類型論からみた母語の影響. ヨーロッパ日本語教育 報告・発表論文集 21: 249-253. (査読有)

吉成祐子, 眞野美穂, 江口清子, 松本曜. 2016. 第二言語における移動事象の言語化: 日本語話者が用いる英語とハンガリー語の研究. Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences 15: 142-174. (査読有)

〔学会発表〕(計 13 件)

Yoshinari, Yuko. 2018. Eye Movements While Thinking and Speaking: Focusing on the Alternation of Active and Passive Voice in English and Japanese. Australian Eye-tracking Conference 2018. Melbourne, Australia.

吉成祐子. 2018. 日本語移動表現における経路表示の多様性. 関西言語学会. 甲南大学、兵庫

Yoshinari, Yuko and Eguchi, Kiyoko. 2018. The Relationship between Language Use and Perception of Responsibility on Apologetic Behavior: a Case Study of Hungarian and Japanese Speakers. Second International Conference on Sociolinguistics 2018. Budapest, Hungary.

Miho Mano, Yuko Yoshinari, and Yo Matsumoto. 2018. Representation of Sequential Path of Motion in L2: L1 Influence, Simplification, and Entrenched Patterns. EuroSLA 2018. Münster, Germany.

Yoshinari, Yuko. 2018. Using eye-tracking for the analysis of grammatical error of L2 learners in transitive alternation. ALLT (Applied Linguistics & Language Teaching) 2018. Dubai, UAE.

吉成祐子. 2018. イタリア語における言語的働きかけによる使役移動表現: 日本語、英語との対照研究. Prosody and Grammar Festa 2. 国立国語研究所、東京

Miho Mano, Yuko Yoshinari, Kiyoko Eguchi. 2017. A bidirectional study on motion descriptions of English and Japanese L1 and L2 speakers: Focusing on the influence of deictic expressions in L1 and the learner language properties. British Association for Applied Linguistics (BAAL) 2017. Leeds, England.

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

Yuko Yoshinari, Fabiana Andreani, Miho Mano. 2017. Reconsideration of path salience in motion events: Coding patterns of multiple paths in Italian, Japanese and English. International Cognitive Linguistics Conference(ICLC) 14. Tartu, Estonia.

Miho Mano, Yuko Yoshinari. 2017. Paths to second language acquisition: Motion event descriptions in L1 and L2 English and Japanese. International Cognitive Linguistics Conference(ICLC) 14. Tartu, Estonia.

江口清子、吉成祐子、眞野美穂、アンナ・ボルジロフスカヤ、松本曜. 2017. 移動表現における着点の有無：通言語的実験研究. 日本言語学会第155回大会. 立命館大学、京都.

吉成祐子、眞野美穂、江口清子. 2016. 日本語学習者の使役移動表現：INTO経路を表す際の中間言語的特徴. 第27回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会. 九州大学、福岡.

Yoshinari, Yuko, Andreani, Fabiana and Mano, Miho. 2016. Reconsidering the typology of motion expressions: Focusing on differences between Italian, English, and Japanese. 49th Annual Meetings of the Societas Linguistica Europea (SLE) 2016. Naples, Italy.

吉成祐子、江口清子、眞野美穂. 2016. イタリア語およびハンガリー語を母語とする日本語学習者の移動表現類型論からみた母語の影響. The 20th Japanese Language Education Symposium in Europe (AJE). Venice, Italy.

〔図書〕(計 3 件)

Mano, Miho, Yoshinari, Yuko and Eguchi, Kiyoko. 2018. The effects of the first language on the description of motion events: Focusing on L2 Japanese learners of English and Hungarian. In Izumi Walker, Daniel Kwang Guan Chan, Masanori Nagami, Claire Bourguignon (Eds.) *New Perspectives on the Development of Key Competencies in Foreign Language Education*. De Gruyter Mouton.

吉成祐子. 2017. 「言語使用の観点から見た移動表現の類型論：日本語・英語・イタリア語話者の主体/客体移動表現」, 西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓(編)『現代言語理論の最前線』開拓社.

吉成祐子. 2016. 「イタリア語の移動表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』くろしお出版.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：江口 清子

ローマ字氏名：Kiyoko Eguchi

研究協力者氏名：アンナ・ボルジロフスカヤ

ローマ字氏名：Anna Bordilovskaya

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。